

基調講演要旨

第1日(9月10日) 10:30-12:00

K202

講演者紹介／司会 藤濤文子(神戸大学)

「身体としてのことば-『スタイル』の限界-」

定延利之(神戸大学大学院国際文化学研究科教授)

一人の人間のことばが、社長に対しては「あの件、どうかよろしく願いいたします」、部下に対しては「あの件、よろしくな」という具合に、さまざまに変わり得るということは、以前からよく知られています。このようなことばの個人内変異は伝統的には、「発言相手(いまの例なら社長か部下か)」、さらに「発言内容」や「発言状況」に応じて話し手が「スタイル」を柔軟に使い分けているのだと考えられてきました。確かにこうした考えが当てはまる場合は多いでしょう。しかし、そうでない場合もあるようです。

男性アイドルグループ「嵐」が、テレビの新番組『嵐にしやがれ』の記者発表をおこなった時(2010年4月20日)のことです。「どんなゲストが来たら緊張するか?」という質問に対して、櫻井翔という「嵐」の一員が次のように答えています:オーレーは、村尾さんかなー。オレの温度としてやっぱり、報道の温度でしか会ってないからー、オレここで「アハー!!」とか言ってんのが見られるのちょっとつらい。

ここで「村尾さん」と呼ばれているのはニュース番組のキャスター・村尾信尚氏のことです、そのニュース番組には櫻井氏も出演しています。では、櫻井氏は村尾氏に「アハー!!」を見られるのがなぜ「ちょっとつらい」のでしょうか? 「いつもニュース番組ではお世話になってます。あっちは報道ですから、まじめなスタイルでやっていますけど、こちらはバラエティなもので、ハジけたスタイルでやっていますので、村尾さんもよろしくハジけてくださいアハー!!」などと言って平気でないのはなぜでしょうか?

「野村はん、うちの主人が生きているうちは揉み手をして、この店の敷居を跨いだあんたが、ようこんな酷いことをしはりましたな」などと食ってかかるのは山崎豊子『白い巨塔』の佐々木よし江未亡人です。野村はただ、「お得意さん」から「倒産寸前の危ない店」へという商売相手の変化に応じて、柔軟に「手のひらを返した」だけなのですが、なぜこんな目に遭うのでしょうか?

あからさまに変えて何ら恥じるところのない「スタイル」や、変わってしまったら精神病理的な問題になりかねない「人格」だけで、私たちはできているのでしょうか? 本当は変えられるが、変わらない、変えてはいけないことになっていて、それが変わっていることが露見すると、見られた方も、見た方も気まずい思いをする「キャラクタ」が、私たちの重要な部分を構成しており、私たちが日々のコミュニケーションで感じる「幸」や「不

幸」の多くは、このキャラクタに密接に関係しているということはないでしょうか？

身体が不変不動のものでは決してなく、コミュニケーションの中で形作られる社会的な側面を持つということは、人類学者・菅原和孝氏が『ことばと身体 — 「言語の手前」の人類学』（講談社、2010）の中で論じられていることです。この講演では、そのような社会的身体（キャラクタ）の観点から、現代日本語のかんたんな記述をおこなうことによって、言語間翻訳の問題と可能性を論じたいと思います。

プロフィール

1962 年大阪生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。神戸大学教養部講師，国際文化学部講師，同助教授，同教授を経て，現在，神戸大学大学院国際文化学研究科教授。専門は言語学・コミュニケーション論。著書に『よくわかる言語学』（アルク，1999），『認知言語論』（大修館書店，2000），『ささやく恋人，りきむレポーター—口の中の文化—』（岩波書店，2005），『日本語不思議図鑑』（大修館書店，2006），『煩惱の文法—体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話—』（筑摩書房，2008），『日本語社会 のぞきキャラくり—顔つき・カラダつき・ことばつき—』（三省堂，2011），論文に Toshiyuki Sadanobu and Andrej Malchukov (2011) "Evidential extension of aspecto-temporal forms in Japanese from a typological perspective" などがある。



1 日目 A 会場(K301) 14:30-15:00

司会 柴原智幸 (神田外国語大学)

A-1

「通訳関連授業における循環型実習タスクの導入による自己調整学習の確立にむけて:その実践例と今後の課題」

大西比佐代 (神戸女学院大学)

通訳養成クラスはもちろんのこと、一般的な語学習得場面においても、コミュニケーション実践にと
もなう不安定要素を随時克服しながら上級スキルを獲得していくためには、学習者は自律的で長
期的視点に基づいた効率的学習方略を確立する必要がある。発表者は、大学院での同時通訳OJ
Tクラスや、民間の通訳スクール、大学学部レベルの逐次通訳・ガイド通訳英語クラスなど上級レベ
ルから、非外国語専攻学部生の必修英語クラスという中級レベルまで、複数の高等教育機関で多
種多様な通訳関連型授業を担当している。そしてそれぞれの授業のなかで、クラスのレベルと授業
の目的に合わせて各種の実習型タスクを複数回導入して、受講生に循環的に熟達を経験させ、さ
らに個別に内省作業を通して自己に適した学習方略の実践と、自律的な自己調整学習の効率的
な確立ができるよう指導している。本発表では、これまでの実践例を紹介し今後の課題について検
討する。

1 日目 A 会場(K301) 15:15-15:45

司会 柴原智幸 (神田外国語大学)

A-2

「大学学部生対象の通訳授業の意義」

内藤 能 (近畿大学)

数多くの大学で通訳の授業が行われるようになった。通訳者という職業にすぐに就くことは実際にはまずない大学学部生を対象に通訳トレーニングを取り入れることに、どんな意義があるのかということを考察する。

通訳養成スクールでは、受講生はすでに目標を通訳者となることと定めているので通訳技術の向上に集中して授業を進めることができるし、受講者もそれを望んでいる。通訳練習と実際に仕事をやる上で必要になる知識や情報などを教え、クラスの中で何人かがプロ通訳者として十分なレベルに達するようなトレーニングを提供すればよいのであるが、一方、大学の授業はあくまで教育の一環であり、受講生全員に何をもちたすことができるのかが、重要である。

学生のほとんどは、卒業後何らかの組織に入り、それぞれの分野の職業の担い手となっていく。教えている大学の学生の大半が就職を希望する関西地域にある国際関係部門を持つ企業などの組織に対してアンケート調査を行った。将来の雇用主側として、大学の英語教育に何を期待するか、大学生の採用に際し、どのような要素を重視しているかを答えてもらった。

多くの将来の就職先組織が高い英語の実用的運用能力を強く期待している。通訳訓練は、その実務性(社会性)、総合性(包括性)、すでにもっている知識の応用であるという面で、企業などが採用時—大学卒業時に学生たちに期待する国際コミュニケーション能力の強化に、資するものであり、高校までの英語の基礎教育と社会人としてのニーズとのギャップを埋めることができるものなのではないだろうか。

1日目 A会場(K-301) 16:00-16:30

司会 柴原智幸 (神田外国語大学)

A-3

「通訳と英語学習—英語教育への貢献を目指して—」

小松達也 (国際教養大学)

20世紀初頭以来、世界の外国語(英語)教育はいわゆる Direct Method(以後DM)を中心として進められてきた。DMはそれ以前支配的だった「訳読法」に対する反動として開発されたという経緯からも、L1の使用と文法規則の明示的提示を極力避けるという特色を持っている(V. Cook 2001, G. Cook 2010)。DMは初期の段階の英語学習には効果的であり、特に“interactional”(会話型)な英語力の習得には優れたものといえる。

しかし、多文化共生の時代の要請と今後の日本人に期待されるより高いコミュニケーション能力を考える時、このDMを中心とした従来の英語学習法は十分でない。ここに通訳者訓練法を活用した新しい英語学習法が果たすことのできる大きな役割がある。通訳はより効果的な英語学習(あるいは教育)に貢献できるいくつかの要素を持っている。

通訳は基本的に「正しい理解」と「明瞭な表現」である。この原則に基づく通訳者養成法は自ずから効果的な英語上達法につながる。通訳における意味(“sense”)への集中と知識の活用によって“mental model”を構築しようとする理解の方法は、従来の言語インプットに依存する方法を効果的に補完する。表現においては、speech planningと文法ルールの“procedurization”によって“clarity of expression”を求める通訳訓練の方法は心理言語学の知見とも合致し“fluency”を高める方法として有効であろう(Schmidt 1992)。英語との構造的、語彙的差異が大きく、英語に接する機会の少ない日本語話者にとっては特に効果的な学習法と考えられる。また、日本語、日本文化の尊重という点からも有益である。

大学での通訳関連授業の課題としてだけでなく、日本の英語教育への新しい貢献という観点から、通訳者養成法の英語教育への応用の意義と具体的方法を考える。

2 日目 A 会場(K301) 9:30-10:00

司会 永田小絵 (獨協大学)

A-4

「オーラルヒストリー・インタビューから見る日中通訳者の規範形成」

平塚ゆかり (立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 D)

Chesterman (1997)は翻訳規範を期待規範(expectancy norms)とプロフェッショナル規範(professional norms)に分類し、且つプロフェッショナル規範を責任規範、コミュニケーション規範、関係規範という概念に分けて提唱した。その上で規範を制約するものとして4つの価値観(明晰性、忠実性、責任、解釈)を挙げ、それぞれが個別の規範に制約的作用を及ぼし、翻訳行為にあらわれる翻訳方略は規範の制約を受ける、と主張した(pp. 147-157)。

周知のように、通訳行為には必ず通訳者の解釈という行為が伴う。そして産出される訳文には通訳者自身の規範意識が密接に関わっていることが窺える。本発表は日本語ー中国語通訳者の文化的・言語的背景や信条、思想などの価値観をインタビューデータより抽出、Chestermanの規範概念を援用し通訳者の価値観と通訳規範意識との関連を探ることを目的とする。実際の訳出行為をともに分析しなければ通訳者の本当の規範は解らないが、通訳者の規範形成を探る上では個人のナラティブ(語り)が有益であると考え、オーラルヒストリーという手法を採用した。尚、本発表は訳出行為分析の前段階の研究と位置づける。

2日目 A会場(K301) 10:15-11:45

司会 中村幸子（愛知学院大学）

A-5

「日英同時通訳における英語産出のための処理についての考察」

是恒孝子（神戸女学院大学大学院研究生）

日本語から英語への同時通訳の訳出では、原発話の日本語に比べて訳出の英語の方が長くなる傾向にあるが、この主な要因には、主要部の位置が鏡像関係にある日英の統語構造のちがいと、ハイ・コンテクストな文化を背景に持つ日本語とロー・コンテクストな文化の英語の単語や表現の持つ意味の広さのちがいがあると考えられる。統語構造のちがいは、特に深い埋め込み文を同時通訳で訳すときに困難をもたらすが、通訳者は意味のまとまりに区切って順送りに訳出する方略を用いることにより認知負荷の軽減を図り時間的制限内での訳出を行っている。また、日本語では一つの単語や表現に幅広い意味を含有させることが可能で、その場合、単なる言語変換のレベルで英語に訳出することができないため通訳者はより深い処理を行う。すなわち、理解においては明確化、曖昧化除去、豊富化等のプロセスを通して推論を行い、産出の段階ではこれらを目標言語に適格な形式でコード化する。そのためには原発言にない言語表現を加えなくてはならない。しかし、これは認知負荷の増大につながるため、認知資源の適正な配分管理という観点から最小限の努力に抑えられていることが予想される。本発表では、実際の日英同時通訳の原発言と訳出を比較分析することにより、通訳者の認知資源の配分管理や、意味のまとまりに区切る訳出などそれに係る方略を産出のプロセスに焦点を当てて考察する。

2 日目 A 会場(K301) 11:00-11:30

司会 中村幸子 (愛知学院大学)

A-6

“Biolinguistics and Creative Interpreting”

Kensuke Yoshimura (Chuo University)

Das Institut der Dolmetscher- und Übersetzerausbildung (IDÜ), or the Institute for Interpreter and Translator Training was founded in 1943 as a new school within the Faculty of Philosophy at the University of Vienna/Austria. The training program there focused on good knowledge of literature in 3 languages, proficiency in practical phonetics as well as attaining fundamental understanding of translation and interpreting theories deeply rooted in German philosophical traditions. Students were constantly reminded not to translate or interpret the words, but the meaning. And this rejection of mechanical translation was pronounced even, or especially, between closely related languages such as German and English. And since the meaning is fundamentally culture and language specific, the students were immediately confronted with the realm of Inequivalenz and untranslatability. Strong sense of linguistic relativity, which has been confirmed by recent findings of cognitive science, was present in the whole training process. Different language means different ways of thinking and different personality. Bridging between languages is logically impossible. Experiencing this Aporia, or a state of complete helplessness (Ausweglosigkeit or sense of “there is no way out”) was seen as an initiation to the world of truly creative translation and interpreting. Finding ways through or around untranslatability must be an extremely complex and creative process. It must be a “biological” process. Recent Findings of molecular biology suggest that biological entities are fluid and yet structured. Individual elements are in constant interaction with other elements. And they seem to be infinitely complex because they appear all the more complex, the more accurate and sophisticated our instruments of observation become. And they always find ways through logical dilemmas.

This paper seeks to apply these and other concepts of modern biology to interpreting process and to postulate interpreting as a process as creative as life itself.

2 日目 A 会場(K301) 13:00-14:15

A-7

＜研究プロジェクト担当企画＞「通訳教育・指導法研究プロジェクト」ワークショップ

中村幸子(代表者)

中村幸子(愛知学院大学)

サブタイトル:「プロジェクトの目的と趣旨説明・実効性のある通訳指導法の検討」

要旨: (1)プロジェクトの目的と趣旨、今後の進め方について、参加の呼び掛け (2)英語専攻の大学 2-3 年生向け(入門・初級レベル)の通訳力養成のための実効性のある指導法とその適切な測定方法を探る。

稲生衣代(青山学院大学)

サブタイトル:「大学における中級クラスの指導法」

要旨:日本の大学では通訳クラスが増え、今後通訳教育において大学の通訳教育が果たす役割が拡大するであろう。本発表では学部の中級レベルの通訳クラスにおける通訳者養成を意識した指導についての考察を行う。

河原清志(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

サブタイトル「通訳リテラシーの養成と通訳教育研究文献の集成」

要旨: 1 つめは、通訳ユーザーを育成し広義の情報リテラシーを高めるための通訳教育のあり方(政策提言)を論じる。2つめは、通訳教育に関する先行研究(言語教育への応用、通訳者養成)の文献集成をする呼びかけを行う。

新崎隆子(東京外国語大学)

サブタイトル:「日⇒英通訳の指導法」

要旨:英語から日本語への通訳訓練については指導法の研究と実践が進んだことにより、通訳能力だけでなく一般英語学習者の聞き取り能力の向上にも役に立つことが報告されている。しかし、日本語から英語への通訳については、未だ有効な指導法がなく、訓練の効果は学習者のももとの英語発話能力の高さに依存している。また、一般的な英語発話能力向上に役立つという報告も見当たらない。本研究では、日英通訳事例の分析に基づき、優れた通訳をするための必要条件を見出し、通訳能力だけでなく一般的な英語学習者の英語発話能力向上にも役立つ指導法の開発をめざす。

西村友美(京都橘大学)

サブタイトル:「コミュニケーション能力育成に資する言語置換トレーニング」

要旨:訳読などの言語置換が実践的コミュニケーション能力の育成にけっして反するものではないという立場から、大学入門レベル通訳授業での具体的な指導法をもとに一般的英語教育にも有効な導入方法を考察する。

友野百枝・宮元友之(大阪女学院大学)

サブタイトル:「学部通訳教育における多面的指導アプローチの研究」

要旨:大阪女学院大学における既存の通訳関連6科目の中から、特に入門科目及び卒業プロジェクト(通訳・翻訳専攻)で導入している指導法に焦点を当て、自律・協同学習等を念頭に置いた実効性ある通訳教授法を探る。

2日目 A会場(K301) 14:30-15:00

司会 西村友美 (京都橘大学)

A-8

「関連性理論と通訳翻訳 ～ TILT の観点から」

染谷泰正 (関西大学)

通訳翻訳では、原文 (ST) と訳文 (TT) という2つのテキストが存在し、この 2 つが何らかの意味で「等価」であることが期待されている。This is a pen. に対して「これはペンです」という訳語を当てるときのように、言語構造および意味の上で実質的に同じことを述べていると感じられる場合は通訳翻訳が問題になることはない。通訳翻訳が問題になるのは、This is a pen. を「これは何でしょうか?」や「これは、実はペンではないのです」と訳した場合のように、明らかに(あるいは微妙に)2つのテキストに違いが感じられる場合である。このような ST と TS の間のズレは、通例、「文脈」および文脈情報を契機とした「推論(=解釈的推意結論)」という2つの要素を介在させることで説明が可能であるが、この観点から発話解釈の一般理論として提示されたのが、いわゆる「関連性理論」(Sperber & Wilson, 1986/1995) である。

本発表では、上記のような有標なケースにおいて、ST と TT の間に何が起きているのかを分析するための枠組みとして関連性理論が有効であることを主張し、これを具体的な事例に沿って立証する。事例分析に当たっては、関連性理論にもとづいて発表者が作成した「翻訳分析ワークシート」を使い、TILT (Translation and Interpreting in Language Teaching) の観点からその教育的有効性および限界等について、発表者の実践に基づいて議論する。なお、本発表ではとくに「字幕翻訳」を例にとって議論する。字幕翻訳では、字数制限という制約のために、学習者は必然的に当該テキストの意味と意図をより深く読み取り、これをできるだけ簡潔な言葉で再表現することを求められる。その過程で、学習者は、翻訳の目的が ST を言語レベルで再現することではなく、ST が意図したコミュニケーション効果を、関連性理論が主張するところの「最適の関連性」を目指して再表現すること——その結果、しばしば「有標な」翻訳が産出される——であることを、より端的に実感できることが期待されるからである。

1 日目 B 会場(K302) 14:30-15:00

司会 水野 的 (青山学院大学)

B-1

「通訳・翻訳活動を通じた災害時多言語情報支援の考察」

内藤 稔 (東京外国語大学)

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、日本人のみならず、多くの外国人が未曾有の大災害の被災者となった。今回、災害救助法が適用された地域(東京都を除く)に暮らす外国人だけでも、その数は約22万7千人に上り、日本の全外国人登録者人口の一割強を占めている。本発表では、震災発生直後に被災地から依頼を受け、その後、全22言語による「多言語災害情報支援サイト」を立ち上げ、被災外国人のための情報支援に携わった東京外国語大学における取り組みを通じて、災害時における通訳・翻訳活動の在り方を考察する。また多言語による情報提供において、何にも増して「迅速性」と「正確性」が求められる中、取り組みを行いながら浮き彫りになった災害関連情報の取捨選択や、支援活動に携わる人的リソースの訳出スキル、及びモチベーション上の課題や注意点についても言及する。今後日本社会が一層多言語・多文化化の道を辿るとされる中、特に平常時における蓄積の真価が問われる緊急時の多言語情報支援において、通訳・翻訳活動を実施する上で肝要となる要素を論じたい。

1 日目 B 会場(K302) 15:15-15:45

司会 水野 的 (青山学院大学)

B-2

「対人援助場面のコミュニティ通訳における『通訳の逸脱行為』の分析とコミュニケーション効果についての研究」

飯田奈美子 (立命館大学大学院先端総合学術研究科 D)

対人援助場面のコミュニティ通訳では、忠実に通訳していくという従来の通訳像から逸脱した行為が行われている。対人援助は具体的な制度施策の範囲の中で行われるが、異文化を背景に持つ人々は、自分たちが大切にしている事柄が制度の枠組みの外とみなされたり、マジョリティの人々に当然とされる考えや価値観が共有されないことがある。このような状況下で、通訳者は対人援助の専門家とクライアント間の関係の調整役やクライアントのアドボケイターとしての役割を担う。このような行為は、従来の通訳からは「逸脱」した行為であるが、クライアントの問題解決に向けたコミュニケーションを成立させるためには必要な行為なのである。しかし、通訳者がこのような行為をおこなうことを正式に認知されていない。また、どのように行うかは、ベテラン通訳者による経験知や通訳者の慈善的精神に依拠しており、どの通訳者もできるように教育・訓練方法の確立もされていない。そこで、コミュニティ通訳の「逸脱行為」がどのような状況で、どのように、何のために行われているか、そして、それが行われることによって、対人援助場面のコミュニケーションにどのような効果がもたらされるかを詳細に分析していくことが、コミュニティ通訳の教育訓練方法を確立していくためにも必要であると考え。研究方法は、報告者が主催している通訳団体で行った事例検討会での事例(42 事例)を用い、事例の中で語られている「逸脱行為」を抽出分類していき対人援助場面のコミュニケーション効果について考察していく。

2 日目 B 会場(K302) 16:00-16:30

司会 田中深雪 (大東文化大学)

B-3

「大衆文化を視野に入れた学部レベルでの翻訳教育のデザイン」

南津佳広 (長崎外国語大学) 田辺希久子 (神戸女学院大学)

学部レベルでの翻訳の授業では、受講生は何を求めて受講しているのか。Tanabe and Minamitsu (2010) では、アンケートと PAC 分析を用いた半構造化インタビューを行い、学部レベルでの翻訳クラス受講生の志向と期待を探った。この結果を市川(1995)による学習内容の重要性と学習の功利性を軸にした、学習動機2要因モデルに基づいて分析したところ、受講生は翻訳の授業を受講するにあたり、語学力の強化や知識の獲得といった実用志向が弱い一方で、翻訳を楽しみたいという充実志向やポップカルチャーへの憧れという関係志向が強いことが分かった。ここで問題となるのは、翻訳という実践的な種類の授業を行うにもかかわらず、従来から日本の教育に欠けているとされる実用志向の欠如に至っているのはなぜなのかということである。本発表では、この問題に対し、戦後日本の教育をめぐる文脈(綾部 2009)を取り入れ、戦前からの教養主義と戦後に顕著となった会話重視の大衆文化の乖離という視点からあらためて分析するとともに、学部レベルの翻訳教育のクラスデザイン、素材選択、受講生の学習への動機付けに関して検討する。

2 日目 B 会場(K302) 9:30-10:00

司会 稲生衣代 (青山学院大学)

B-4

“Six Techniques for Enhancing Japanese to English Machine Translations”

June-ko Matsui, David Magnusson (Meikai University)

1. Introduction

Numerous on-line machine translation systems make it possible for Japanese users to write in English more readily. Although significant technological progress has resulted in vast improvements, differences in grammar etc. still result in unnatural or incomprehensible translations. Methods to overcome such problems are not widely available to English learners. For instance, English usually requires a subject, whereas Japanese does not. When Japanese users fail to insert the subject, machine translation systems do not know which subject to use, thereby inserting the wrong subject, or simply use the neutral word “it”. For instance, the Japanese sentence: “Dobutuen (=zoo) ni(=particle) ikimashita (=went). (動物園に行きました。 “I went to the zoo.”) is incorrectly translated, “It went to the zoo.” by the most popular machine translator in the Japanese Google search engine, “Excite”. This study is an attempt to patch structural differences between the two languages that machine translations do not address, using a six-step method. The procedure provides English learners a tool to expand the scope and accuracy of their communication.

II. Method

Eighty-eight English learners were asked to write a Japanese passage on a memorable event. They were next instructed to translate it into English on their own, then translate it using the three most popular on-line machine translation systems on the Japanese Google search engine: Excite, Google, and Yahoo. They were then given the following six-step instructions to make their machine translations more natural and accurate:

1. Make longer sentences shorter.
2. Insert subjects such as “I, you, he, she, and they”.
3. Replace words that have multiple meanings. (ex. 「通っていた」(went to) → 「習っていた」(learned))
4. Clarify whether nouns are singular or plural.
(ex. 「男」(man/men) → 「男たち」(men))
5. Add in determiners for nouns. (ex. 「先生に」(teacher) → 「その先生に」(the teacher))
6. Check the spelling of proper nouns.

Users were also requested to fill out a survey on the machine translation and their English studies.

III. Results

Results indicate that improvements were made before and after the instruction. For instance a comment written by one user: (totemo (=very) tsukaremashita (=was tired)) 「とても疲れました。」 meaning “I was very tired.” is translated “It became tired very much.” by the Google translator. After inserting the subject, watashi (=I) wa (=particle) totemo (=very) tsukaremashita (=was tired) 「わたしはとても疲れました。」, something closer to a correct translation “I’m very tired.” resulted.

Many language learners (35%) feel their own translations are better than the machine translation. However, most users (94%) say they want to use the machine translation systems in the future. The six step manual resulted in improved, albeit not perfect machine translations, and appears to be a promising tool for language learners.

2 日目 B 会場 (K302) 10:15-10:45

司会 水野真木子 (金城学院大学)

B-5

「司法通訳翻訳教育の試み—立命館孔子学院の事例紹介—」

吉田慶子 (立命館大学)

立命館孔子学院は、2005 年に北京大学との共同により日本で初めての孔子学院として開設された。その後、東京学堂、2008 年には同済大学との協力により大阪学堂が開設され、合わせて 6 拠点で事業活動を行っている。

学院は、中国語教育の普及と向上、中国文化の紹介などを通じて、日中相互間の理解と交流を深めるなどを設置の目的とし、現在、すでに 60 クラス以上の中国語講座を実施している。

昨年の 9 月から立命館孔子学院の新しい試みとして「司法通訳・翻訳入門講座」を開講した。

司法通訳と翻訳の教育は、一般の語学教育や通訳訓練と違って、語学能力を上げるための訓練はもちろんのこと、刑事手続の流れに関する理論的知識や法律専門用語の解説も教育内容に組み入れなければならない。

発表者は当該講座の開発及び担当講師として 2 期にわたり教えてきた経験に基づいて、いかに基本的な理論知識を導入し、実践的な演習を通じて学習者の通訳・翻訳の力をあげて行くかの試みを紹介し、皆様の知恵とアイデアを引き寄せたいと願っている。

2 日目 B 会場(K302) 11:00-11:30

司会 染谷泰正 (関西大学)

B-6

「法令翻訳メモリデータベースシステムの開発」

関根康弘 (立教大学異文化コミュニケーション研究科 M)

日本法令の翻訳のニーズの高まりに応じる形で 2009 年 4 月、法務省によって「法令外国語訳データベースシステム」が公開されました。筆者はこのシステムの設計／開発を行い、現在もその運用に携わっています。現在、261 の法令の翻訳が公開されていますが法令全体(約 8000)から見るとごく一部で、十分な数の法令の翻訳が公開されているとは言えません。また、一般のユーザから誤訳の指摘を受けることが度々あり、同じ原文に対して異なる訳文が充てられているケースもみられ、利用者の理解の妨げとなっています。

各所管府省庁によって外部委託される法令翻訳業務は通常入札によって決定されますが、翻訳のスキルを測るような入札資格の基準がないため、金額の安さのみで決定される場合がほとんどで、品質の低下を招く大きな原因となっています。また、このような仕組みでは翻訳のノウハウ、リソースが分散してしまい、品質のばらつき、訳の不統一などにもつながります。このような背景から、法令(各所管府省庁)横断的なリソースの管理、運用が必要であると考えました。

さらに、現状の法令翻訳の手法は産業界の翻訳に比べ、IT 技術を用いた効率化がほとんどなされていません。旧来の紙主体の手作業による翻訳作業では効率が悪いコストがかかります。現在の経済状況では潤沢な予算の確保は難しく、このことから法令翻訳の推進において効率化によるコストダウンは急務であるといえます。

これらの現状の法令翻訳がもつ課題を解決し、法令翻訳の推進に寄与することを目的として、法令翻訳メモリデータベースシステムを開発しました¹。まだ試作の段階ですが今後各方面の様々な意見を取り入れ、充実させていきたいと考えています。

今回はこのシステムの概要とデータの収集の方法、蓄積されたデータの統計と分析、データベースの設計とシステムの持つ様々な機能、そして将来的なシステムの構想について発表したいと思います。

¹ <http://211.5.128.138/transmemoryweb/>

2 日目 B 会場(K302) 13:00-13:30

司会 水野真木子（金城学院大学）

B-7

「多文化共生施策に伴う多言語情報の政策的課題」

山本一晴（大阪大学大学院人間科学研究科 D）

総務省は2006年3月に「多文化共生推進プラン」を策定した。地域社会での多文化共生を促進しようとするものであった。駅や街角などの公共の場には多言語景観が拡がり、多言語による情報提供の取組みも浸透しつつある。本報告では、多文化共生推進プログラムにおけるコミュニケーション支援としての「行政情報の多言語化」を翻訳政策として捉え、その支援の対象とすべき目標テキストの受け手及び翻訳内容を考察し、多言語化現象とその行方に迫りたい。行政情報の多言語化は予算の制約上、多くの地方自治体では翻訳コストの削減と人的資源の確保という課題を抱えつつ、無償あるいは限定的有償のボランティアに頼らざるを得ない状況にある。具体的には、多文化共生施策を展開している地方自治体での聞き取りを踏まえて、調査報告書や情報の多言語化に係る方針の分析を行う。さらに、政策と実践との整合性を検討する。今後の多言語化に係る翻訳の実践に向けて、情報の内容別優先度と更新頻度を掛け合わせた言語選定方法について提案を試みたい。なお、本報告が対象としている多言語情報とは、受益者の特定が可能な住民サービスとしての情報であり、各自治体が提供を主として担っている場合に限定する。

2 日目 B 会場(K302) 13:45-14:15

司会 水野 的 (青山学院大学)

B-8

「可視性から文芸出版界への参加へ—マーガレット・アトウッド翻訳の最初の5人の翻訳者を中心に—」

ビロドー・イザベル (名古屋大学国際言語文化研究科 D)

L. ヴェヌスティが指摘したように、欧米では殆どの翻訳者が文芸出版界において「目に見えない」存在にされる。対照的に、日本において活動する翻訳者は基本的に「可視性」に恵まれている。特に、訳者の名前が書籍の表紙に表示されること、そして殆どの訳本が「訳者あとがき」を含むことは、可視性の根本になっていると思われる。この基本的な可視性があるため、翻訳者は読者や批評者に対して「名を成す」ことができるようになっている。しかし、すべての文芸翻訳者が有名になる訳ではない。では、文芸の場において、「行為者」である翻訳者はどのように可視性を上げるのだろうか。

本発表ではケーススタディとして、マーガレット・アトウッドという作家の小説を日本語に翻訳した最初の5人を中心に、翻訳者の可視性を検討したい。各翻訳者についてはキャリア・パスを調べ、日本の文芸の場の「要件」にどのように応えようとするのかについて考察する。また、この「要件」に関しては、彼らのキャリアを観察することで明確にしていく。特に、アトウッドの翻訳者は、文芸出版の場における自分の「可視性」を意識していることを、各翻訳者のキャリアの分析から明らかにする。また、「場」のルールに従って行動する動機付け(P. ブルデューのいわゆる *illusio*)を持つ日本の文芸翻訳者は、文芸出版の場に充実した参加ができることを示唆する。

2 日目 B 会場(K302) 14:30-15:45

B-9

＜研究プロジェクト担当企画＞「通訳者の役割—言語使用の観点から」ミニシンポジウム

水野真木子(代表者)

水野真木子(金城学院大学)

サブタイトル:法廷通訳人が訳出の際に行う危機管理についての言語分析

要旨:実際の裁判記録、そして科研費および日弁連法務研究財団助成金によるプロジェクトの一環として行った模擬法廷記録に基づき、法廷通訳者が訳出の際に、正確性を実現するという役割を全うするためにどのように危機管理を行うかについて、backtracking と paraphrasing を中心に分析する。

中村幸子(愛知学院大学)

サブタイトル:法廷通訳に期待される役割と現実—模擬法廷の言語分析—

要旨:科研(新学術領域研究)・法廷通訳研究班が行った模擬法廷において通訳者の役割葛藤が表れる場面を取り上げ、通訳者が、裁判関与者が抱く通訳への役割期待と通訳者自身の役割意識・倫理観の間にみられる葛藤をどのように調整しているのかを検討する。

吉田理加(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

サブタイトル:談話における法廷通訳人の役割(フッティング)分析

要旨:通訳を介した裁判員裁判のフィールドノートデータをデータとして、法廷談話の特徴に応じて談話における通訳人の役割(フッティング)がどのように変化するか、そして、通訳人のフッティングの変化が法廷談話に及ぼす影響を記述し、報告する。

河原清志(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

サブタイトル:通訳者役割論の理論的可能性

要旨:通訳者役割論は主に①社会学、②コミュニケーション学、③通訳学プロパーという理論的射程にある。はじめに①役割理論及びその下位概念(役割演技、役割期待、役割距離、役割取得など)と②認知的・感情的な側面を論じ、次に③規範論(期待規範と職業規範との相克)を接合し、これらと通訳の発話テキスト分析との架橋の可能性を探る。

1 日目 C 会場(K303) 14:30-15:00

司会 長沼美香子 (立教大学)

C-1

「報道における固有名詞の翻訳:言及指示と相互行為の織りなすテキストの多層性」

坪井睦子 (立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士 D)

本発表は、社会記号論系言語人類学のコミュニケーション観、すなわち「出来事モデル」を理論的枠組みとし、固有名詞の訳出という視点から報道における翻訳実践の相互行為性とその多層性を検証することを目的とする。

Silverstein (1976a) は、コミュニケーションを指標的な「出来事」と捉えて、言語行為を含むコミュニケーションには、何かについて「言われていること」(言及指示的機能)だけでなく、コンテキスト依存性のきわめて高い「為されていること」(社会指標的機能)という2つの側面があるとして概念化を行った。これが出来事モデルである。ここではコミュニケーションは、オリゴ(コミュニケーションにとっての「今・ここ」)を基点とし、マイクロからマクロまで同心円状に広がる多層的な社会文化的コンテキストにおいて生起するテキスト化(脱コンテキスト化)とコンテキスト化の相互過程として捉えられる。

近年まで、報道における翻訳は、「事実」を客観的に扱うものとして、文学に代表されるフィクション領域と比べその相互行為性についての研究が十分進んでこなかった。本発表では、報道における翻訳もまたテキスト化とコンテキスト化の織りなす多層的な相互行為であることを、具体的事例として旧ユーゴ紛争報道を取り上げ、その固有名詞の翻訳に注目することによって明らかにする。一般的に、ある対象物そのものを指し示す固有名詞は、コンテキスト依存性が低いと見られがちである。しかし、Silverstein (1976b) が示したように、名詞句という文法範疇もまた、コンテキストに基礎づけられ、言い換えるとオリゴを基点とした指標性の大小に基づいて階層化されており、固有名詞はダイクシスに次ぎ指標性が高いとされる。この固有名詞の翻訳実践を分析することを通し、報道翻訳というコミュニケーションの多層的一面を示すことを試みる。

1 日目 C 会場(K303) 15:15-15:45

司会 長沼美香子 (立教大学)

C-2

「広告翻訳における『7つの問題』と翻訳モデル:内部観察による事例分析を通して」

三ツ谷直子 (立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科前期課程修了生)

本研究は、広告のローカリゼーションにおける広告コピー翻訳の研究である。イーミック (内部観察者) すなわち広告翻訳のプロの観点から、広告翻訳は「広告」の一種であるという考えに基づき、機能主義的翻訳理論の「目標ロケール重視」の立場から考察を行う。具体的には、広告翻訳における「7つの問題」を精緻に示しながら、それを基に理論化した広告翻訳モデル「5CACT モデル」を提示する。

特に「7つの問題」については、もっとも顕著に見られる問題として「言語と文化 (価値観)」の事例を多く示し詳細な議論を行う。さらに、それを踏まえた上での広告翻訳モデル「5CACT モデル」を示しながら、実際の広告翻訳においては、どのような分析が必要で、どのような段階を経て翻訳する必要があるのかについての考察も深めていく。

実際の広告翻訳活動における問題を「7つの問題」として顕在化させることで、それらの課題解決に向け、実際にどのようなアプローチが求められているのか、今後どのような取り組みをすべきなのかについて、世界情勢やメディア環境の変化も視野に入れながら考察する。

1 日目 C 会場(K303) 16:00-16:30

司会 友野百枝 (大阪女学院大学)

C-3

“Does language form our sense of self?”

Rieko Matsuoka (National College of Nursing)

Aims and Method: When translating culturally-colored discourse, a great deal of effort is required to overcome the complexities of and problems caused by the uniqueness of the source text. In this study, *rakugo*, which is the traditional Japanese performance art of telling comic stories, will be a source text for analysis. The culturally-specific features and the factors causing complications in the translation process will be explored, based on some excerpts from '*Himaraya no hokutoshichisei*: Septentrion over the Himalaya', the original *rakugo* script written by Sanyutei Kyoraku. According to linguistic relativity (e.g., Slobin, 2003), differences in perspectives on reality often manifest themselves as specific features in language use in speech communities, and these differences seem to cause complications in translation because some words are specific to a particular language and cannot be translated literally. Translating the culturally-colored script, therefore, may necessitate the in-depth examination or exploration of given cultures or worldviews. By examining the data with the notion of linguistic relativity in mind, the first and second person pronouns are highlighted as focal points. Accordingly, the aim of this study is to examine the frequency of first-person pronouns uttered or not uttered in Japanese where they are uttered in English, and the frequency of second-person pronouns uttered or not uttered in Japanese where they are uttered in English, and to investigate the ways in which these phenomena are related to linguistic relativity hypothesis, including Hall's (1978) notion of high-context and low-context societies. Furthermore, Japanese socio-anthropological characteristics are considered. *Results and conclusion:* First-person pronoun omissions appear in more than half the cases (51/8%) where the English translation needs first-person pronouns. Moreover, half of the omitted first-person pronouns cannot be uttered in natural Japanese dialogic interaction. In the rest of the cases where the first-person pronouns are used, approximately half of them cannot be omitted. Second-person pronoun omissions appear more frequently (56.3%) than first-person pronoun omissions. Additionally, the second-person pronouns in Japanese are regarded as derogative and names or social roles are used instead to address the dialogic interlocutors. Linguistic relativity, including the notion of the high and low-context society, and Japanese mores of being other-orientation (e.g., Kuwayama, 1992) seem able to interpret the linguistic phenomena of first and second-person pronoun-use revealed in the process of translating the *rakugo* script.

2日目 C会場(K303) 9:30-10:00

司会 西村友美 (京都橘大学)

C-4

「小説およびマンガにみられる日本語擬音語・擬態語翻訳手法の比較—英語およびスペイン語を例に—」

猪瀬博子 (Dalarna Universty)

日本語で多用される擬音語・擬態語は、翻訳者にとって大きな課題の一つである。特に近年は日本語のマンガが多数の言語に翻訳されているが、文芸作品等「通常の形態の」の文章に比較して、情報の伝達において文字のみでなく絵が大きな役割を占めるマンガにおける擬音語・擬態語の使用法は独特であり、その翻訳も小説等とは異なってくる。

本発表では村上春樹の小説「スプートニクの恋人」、および高橋留美子のマンガ作品「めぞん一刻」を例に、小説およびマンガにおける擬音語・擬態語の使用、およびこれらの表現をスペイン語および英語に翻訳する際に利用された手法を比較する。小説では文章の一部として文法的役割（多くの場合副詞）を担う擬音語・擬態語は、マンガではコマの中に効果音的に描き込まれ、単独で使用されることが多い。この使用法の差異は、翻訳において前者では単語の意味を、後者では「音、動作などが存在する」という事実を重視することにつながり、結果的に非常に異なった手法での翻訳が行われることになる。本発表では、小説から抽出した 300 件、マンガから抽出した 140 件のデータをもとに、それぞれのジャンルで使用された各種の翻訳手法をみていく。

2 日目 C 会場(K303) 10:15-11:30

C-5

＜研究プロジェクト担当企画＞「翻訳研究育成プロジェクト」成果報告と第二期の企画について

水野 的（代表者）

昨年発足した「通訳研究育成プロジェクト」の活動と成果を報告し、第二期の企画の内容について議論する。これまでのところ本プロジェクトに関心を持つ会員と話し合う機会が十分に取れなかったため、個別の発表は行わず、活動と企画の内容について批判や提案をしてもらいたい。

2 日目 C 会場(K303) 13:00-13:30

司会 三ツ木道夫 (同志社大学)

C-6

「村上春樹『ノルウェイの森』におけるテンス・アスペクトのインドネシア語への翻訳—『ている』『ていた』を中心に—」

Yuli Restiani (九州大学大学院比較社会文化学府日本社会文化専攻 D)

インドネシア語はテンスのない言語であると知られている。日本語のように動詞の活用による文法カテゴリー的なテンスマーカ―はないが、アスペクトは存在している。本稿では、日本語のテンス・アスペクトはどのように認識され翻訳されているか、村上春樹『ノルウェイの森』を利用し、調査した。

先ず、日本語からインドネシア語への文法的に对照比較した後、目標テキスト(TT)であるインドネシア語訳版とその起点テキストである日本語版を対象比較した。

その結果、インドネシア語は定的時間副詞、相関的時間副詞、機能語、接辞(接頭辞・接尾辞・接中辞・接周辞)またはそれらの組み合わせによるあらゆる方法テンスを表すことができる。しかし、動詞の接辞の付加によるものが多いが、副詞や助動詞的のテンス的マーカ―が非常に少なく、文脈依存的である。

また、TT から ST との比較对照を行った結果、日本語の小説の特徴だと言われる「歴史的現在」的の語り方が、インドネシア語訳の村上春樹『ノルウェイの森』の翻訳では、登場人物たちが「過去」と「現在」の間に流されているという日本語の特徴的なニュアンスが欠如していると感じられる。

2 日目 C 会場(K303) 13:45-14:15

司会 三ツ木道夫 (同志社大学)

C-7

『無明と愛染』から『空与色』へ—欧陽予倩による中国語翻案劇について—

尹永順 (神戸大学国際文化学研究所 D)

『無明と愛染』(1924)は上演を目的として中国語に翻訳された谷崎潤一郎の唯一の戯曲である。1928年に欧陽予倩により翻訳され、『瀟金蓮』に収録された『無明と愛染』は「中国で上演するのに適する」作品として選定され、翌年の1929年には欧陽予倩を所長とする広東演劇研究所の開所式で上演された。『無明と愛染』の中国語訳は標題が『空与色』に変わっただけでなく、作品の中の人名や地名が中国人の名前や地名に変えられたり、削除されていて、あたかも中国で起きた物語のようになっている。いわば、欧陽予倩による翻案劇である。

中国ではレーゼドラマの翻訳は多かったが、上演可能性という点で翻訳に対しても要求が厳しくなり、実際上演されたものは少なかった。日本新派劇の影響を受けて中国で生まれた翻案劇は、外国の戯曲を受け入れる際に直面する「翻訳の困難、演出の困難、装置の困難」を解消する有効な方略として、中国話劇(近代新劇)の誕生、発展期に使われていた。欧陽予倩によれば、翻案劇とは「外国の劇本を中国の事実書き換え、中国語、中国の服装、中国の舞台装置で上演するものである」。社会文化背景が異なる舞台上で上演を成功させるのに必要な調整であったと考えられる。

翻訳者の欧陽予倩(1889～1962)は中国話劇の創始者の一人として話劇の発展に力を尽くし、演劇理論家だけではなく、実際に舞台上に立った役者でもあったため、常に上演可能性を重要視していた。そのため、彼の翻訳は中国における外国劇の翻訳及び役割を実証するのに最も重要な作品だと考えられる。

本発表では、『無明と愛染』が欧陽予倩によってどのように翻案(中国化)されたのかを考察し、中国当時の時代背景、及び中国話劇史との関係においてその原因を解明したい。

2 日目 C 会場(K303) 14:30-15:00

司会 三ツ木道夫 (同志社大学)

C-8

「昭和初期における“円本”と外国文学翻訳をめぐる」

佐藤美希 (札幌大学)

大正 15 年から相次いで出版された「円本」(一冊一円でほぼ毎月一冊ずつ販売された文学全集)が、日本における文学受容を一般大衆の読者層に向けて大規模に拡大させた諸相は、様々な研究成果によって既に明らかにされている。(ex. 紅野 1999; 2009、永峰 1999; 2000 など)円本の嚆矢は改造社の『現代日本文学全集』(大正 15 年 12 月 25 日第 1 巻発行)であるが、外国文学については、翌年 3 月 18 日に新潮社による『世界文学全集』が刊行され、その後第一書房の『近代劇全集』と近代社の『世界戯曲全集』が続いた。これらの外国文学全集には以下の特徴がある。第一に、各作品を新訳あるいは旧訳の全面的な改訳の上で所収しただけではなく、重訳や抄訳はないということを強調している点、第二に、例えば「世界人としての資格を全うせしめる教化機関は翻訳文藝の外にはない」「翻譯の大衆化」(『世界文学全集』)といった明確な出版意図があるという点である。後者に関しては、改造社の市場的成功に追随せんとする営利的指向を隠す建前という一面があることに疑いはないだろう。しかしながら、上記のような翻訳方針が新聞広告や内容見本を通じて大々的に宣言された以上、それは従来の翻訳出版とは異なる方針のアピールであり、翻訳観の変化を示す重要な資料となると考えられる。

本研究では、円本出版の背景にあった翻訳観を抽出するために、上記三種類の外国文学の円本の月報(毎月配本される各巻に付された小冊子)に記載された翻訳に関する言説を考察する。円本という昭和初期に日本における読者の文学受容を大きく変容させた媒体を通じて、当時外国文学の翻訳がどのように考えられていたのかを明らかにしたい。

2 日目 C 会場(K301) 15:15-15:45

司会 田邊希久子 (神戸女学院大学)

C-9

「中←→日翻訳クラスにおけるスラッシュ・リーディング指導とその効果」

永田小絵 (獨協大学)

2010 年度から学部の演習科目で中日翻訳の指導を行っているが、「読解と翻訳のためのスラッシュ・リーディング」として文法訳読にスラッシュ・リーディング(slash reading、以下 SR と略称)を用いている。今回の発表では読解に用いた SR メソッドを紹介し、さらに二年間の指導結果を分析することを目的とする。発表では最初に SR 指導のきっかけとなった学部3・4年生の読解力不足の事例をあげる。次にその原因を文法分析力にあると仮定する。続いてSR指導を行うことによって、学生の苦手な文法用語を使わずに文法的に正しく読むためのルールを身につけさせる方法と工夫について具体的な授業の方法から紹介する。さらにSR指導を受けていない学生の翻訳と指導を受けた学生の翻訳を比較することで以下の点を明らかにする。

- ① SR 指導の効果
 - ② SR では解決できない誤読の所在
 - ③ 文法的に正確な解釈から「こなれた翻訳」あるいは「分かりやすい通訳」への転換
- 以上を踏まえ、今後の読解力・翻訳力向上のための指導法について検討する。

1 日目 P 会場(K 棟 2 階ロビー) 13:00-14:30

P-1

「英日翻訳のテキスト分析方法論の諸相」

河原清志 (立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

本発表は、英語から日本語への翻訳テキストの分析方法を分析するメタ理論の研究を目的とする。

翻訳に当たって翻訳者は、翻訳における①言語的等価及び②社会的等価を実現するために、①起点言語と目標言語の統語構造や意味構造、情報・テキスト構造、文体構造、(言語に現れる)社会文化構造などの違いを踏まえた上で(言語構造論)、②翻訳の諸目的や社会的役割・機能に応じて起点言語を目標言語に「転換」し、かつ「介入」する操作を翻訳実践行為として行っている(翻訳実践論)と想定される(代表的な先行研究として、Vinay and Darbelnet 1958/1995、Catford 1965/2000、Toury 1995、Chesterman 1997、Munday 2007、Baker 2011 など)。この①「転換」という言語的実践行為と、②「介入」という社会的実践行為がどのような言語項目についてどの程度現象しているのか、そして翻訳におけるテキスト(言語的側面)とコンテキスト(社会文化的側面)がいかに関連するのかについて、翻訳物の言表に現れる翻訳シフトを緻密に論じることによって分析したい。そしてこのような分析を通して、翻訳研究におけるテキスト分析の様々な方法の有効性を検証したい。本発表での翻訳テキストの分析対象は出版翻訳とメディア翻訳の分野を予定している。

1 日目 P 会場(K 棟 2 階ロビー) 13:00-14:30

P-2

「観光案内通訳における言語行為:量的アプローチ」

林雅芬 (台湾国立台中技術学院)

本研究で取り上げる「観光案内通訳」とは観光スポットで解説案内員が解説した内容を通訳者が逐次的に通訳するものである。通常、観光スポットでは、

日本の通訳案内士試験に合格した通訳案内士、または、台湾のガイド国家試験に合格した外国語ガイドが、直接観光客の母国語で案内をする。これに対して、国際交流や国際ビジネスの活動においては、観光案内の予定が頻繁に組み込まれ、ビジネス通訳やエスコート通訳を担う通訳者が同行することが多いが、自ら観光スポットの解説をするのではなく、他人が解説した内容を観光客の母国語に通訳する「観光案内通訳」ということがよくみられる。

筆者は林(2010)で、台湾と日本で収集した観光案内通訳のデータに基づき、話者の発話意図を推測したうえで、対人関係的言語行為(interpersonal illocutionary act)とテキスト形式的言語行為(textual illocutionary act)の観点から、観光案内通訳における言語行為を考察し、談話構造の特徴を分析した。しかし、各言語行為の詳細な分布や、言語間・テキスト間の類似点・相違点などが課題として残された。そこで、本研究はもう一步進んで、量的アプローチから観光案内通訳における言語行為の特性をより明らかにしていきたいと考える。

キーワード:観光案内、通訳、言語行為、意図